なし 合 月を見ばやと 合 ちぎりし人も 合 こよひ袖をやしぼるらん、

三味　本調子

狐　火

あだし此身をや煙りこなさば 合 せめてくるわのさとちかく 合 くるわのや 合 くるわのせめて 合 せめてくるわのさとちかく 合 何を思ひにやこがれてもゆる 合 野邊の狐火さよふけて 合 思にやこがれてもゆる野邊の狐火さよふけて

三味　本調子

き　ぶ　ね

雲のゐにあれたる駒は繋ぐとも、二道かくる其人を、いかに賴まん仇し野の、あだし此身は儘には成らぬ、月日稽へて昔のわけを、思ふもぬるゝ我袖の 合 湊へ歸るあだ浪の、よる〳〵でこに立出て、ふりあげ見れば、大原や 合 御室に近き小塩山 合 紅の森の木の間わけ、通ひ車のたそがれ見れば、車の〳〵たそがれ見れば、包むつらさを袂に餘る、わけをゆふぜん左のかいな、もゝにすけ樣命こほりし、其睦ごともいつしかに、かはる淵瀬と歎いた、海人の捨ぶね我一人、こがれ〳〵て行水の、影さへ淸き加茂川や 合 二上りやつれ果たる 合 我顏ナかたち 合 かくは見捨

そよしなやな、三尺袖を年がよりたら何振ろにしやうがいな 合 振れやふれふるつまいとし我ふるづまをへ、ゐい〳〵、後にみぞろの池涙に、ひよ〳〵と鳴ひよ鳥小池に住は鴛鴦 合 はんま千鳥がちゝりんちゝりんな、ちゝりんちゝりつちん〳〵、ぢつとして、扨なゐりくりゐんじよの、岩間〳〵を傳ふ、足は千鳥足 合 西は田のあぜ、浮雲あぶない、〳〵〳〵〳〵あぶなうてならぬへ、細路あぜ路をくゞり〳〵〳〵て 合 くゞり〳〵〳〵て、松の嵐に 三下り さつ〳〵とたぎりて落る、鞍馬川 合 本調子 戀の淵瀨とたぎれしも猶も思ひはうしの時、つき出す鐘と諸ともは、貴布禰の社に着にけり

き　ゞ　す

三味　三下り

雉子なく野邊の若草つみ捨られて、餘所の嫁菜といつか扨こがれ焦るゝ 合 苦界のふねよ、寄るべ定めぬ身はかげろふの、吾妻が顏も見わすれて現ないぞや、是の男あれ、虫さへも番ひ放れぬ揚羽の蝶 合 あれ〳〵 迚も二人づれ、好た同士のなか〳〵に 合 春にも育つ花さそふ、菜種の蝶は花しらず、てふは菜たねの味知らず

知らずしられぬ中なれば、うかれまい者さりと　は　合其方が世話に容ふりも　合我身の末のはなれ駒ながき夜すがら引しめて　合むかしがたりの飛鳥川

ゆ之部

夕霧文章

三味　本調子

前弾　なに九年くかい十年花衣　合きまゝに遊ぶ鶯の　合梅に廓の懸風や、その扇やの
かな山と名に立ち登る全盛の　合まつにしがらむ藤かづら、なれそめて濃紫の　合明
の烏のそれなりにかねもにくまずね亂れ髪の結ぼれら、すいた同士の中さへもあ
だに別れて丸一年、ふたとせごしにおとづれも、泣いてあかしてかこちごと、怨
みを誰に夕霧が　合二世とかけちをつく〳〵と　合もたれかゝりし床柱、思ひに沈む
こひが浮世をなんじやろいな、だるまさん、いろごと知らぬこのたちは、玉の盃
底がない、おまへのすその本來はへつてないのでありそなものを、しよう事なし
のこひ知らず

夢の浮橋

三味　本調子

石山や、源氏の巻の葉をわけて、鳥照月にうかみ初め　合涙間を分る有様やゝ　有にも
もあらで消る幣木の　合もぬけて遁れ空蟬の、合ぬ愁さを憧るゝ中に　合思ひぞ積る
君の夕顔　合くるゝ夜を遠しはかなくも消し花の縁かたみの、扇名にさゝずみをつ
くしてや飛螢　合かたみに絞る袖の露、つゆに宿かる鈴虫の　合ふり捨がたき憂き思
ひ、畫は幻夜な〳〵は心づくしの夢の浮橋

夕べの雨

三味　二上り

見たい逢ひたい、かくてもすぐる、身ぞ愁や　合いつそ絶なは絶よかし　合三筋の糸
に　合せめては憂さを忘れやせんと、暫し向へば忘れはやらで、松風ならぬ面影か
よふ、兎角戀路は、夕べの雨の、晴間知られぬ我れもひ

由縁の月

三味　本調子

憂しと見し、流の昔なつかしや、可愛男に逢阪の關より、愁ひ世のならひ　合思は
ぬ人にせき留られて今は野澤の一ッ水　合澄まぬ心の中にも少時、すむは由縁の月
の影　合忍びて寫す窓の内廣い世界に住ながら　合狭ふ樂む眞ごと實、こんな縁が唐に

も有ろか　合花咲里の春ならば、雨も薫りて名や立ん

ゆかりの色

三味　二上り

頃は彌生のなかばにて、思ひ初けん江戸むらさきの、包むとすれど月にあらはるゝ、花にいろ〳〵心を盡す、高き梢に身を碎きせめて、夢にとまどろめば、憂きを忘れぬ通宵、任せぬ床の一人ごと、はや曉の鐘の音や　合雞の聲さへもしもやと心亂るゝ糸やなき、結ぼれ解ぬ玉の緒の、かけて祈らぬ一筋に、積りつもりて袖はたゞ、涙のふちや淀川の、深き思ひを知らせて君の、心知りたや〳〵と、言の葉ぐさ添ぶしをいつか逢ふせゝ松のうら風

雪だるま

三味　本調子

みちのくのいはでしのぶをなさけとも、愚かなる身はゐを知らず、つぼの石文かきつくす、文も許さで心から　合心に傳ふせきれいの、教への外の法の道、うそかまことか白壁を、にらみすまして夜もすがら　合座禪にあかすひとり寢は、鐘に怨みもあらばこそ、鳥の八聲も夢となり　二上り　悟りの窓の夜は明けて　手事のごけき春の朝日影、心とけては本來のいちもつもなきゆきだるま

雪景色

三味　二上り

雪景色　合れもしろの四方の山邊も白妙に　合見渡す空の薄がすみ、雲と見しは、白雪の〳〵〳〵拂へど拂へど降つむ　合花と見紛ふ梢にも幽艶や、何れも白妙に　合なかめ〳〵て雪や氷りも見ながらに、袖をかざして立寄れば　合それは木々の花、切くべて樂まん酒にいざや、遊ぶべき、先冬季より咲初る、窓の梅の北面は、雪ほうじて寒きにも異木より先たてば先梅を伐や初むべき　合梅はさま〳〵有る中にさ早咲き梅のわつさりと、〳〵、色よし品よし信濃梅、思ひこがれて書く玉章を、便り求めてやり梅や、那方へとんとゝをり梅、この枝がさわらば御免なれ、ふり振て〳〵、ふつて〳〵〳〵〳〵　合振ふつた袖振の誰が袖の香の匂ひ梅、初音床しき鶯の羽風につれてふはと亂れ亂れ〳〵亂るゝ垂れ梅　合しなと拍子をかゝへ〳〵て、夫それ、〳〵、〳〵、其處らでしめろ任せてをけろの、とんと、とんと、〳〵はづんで鞠梅、ひいふう三四五六なゝやあの、音は〳〵しとゝん〳〵、〳〵しと

〻ん〳〵〳〵と、丁度百ついた面白や　合　數々の盃は、どこどこ〳〵へ廻つた
てうにてうじてうくら、ちよろ〳〵めきのてう四郎、はなしよしのてう太郎ず
うわんばうにわにふだう、早々たて〻遊んだ　合　ざん〳〵ざん〳〵ざ、濱松の音は
幾千代、御夜は萬年

夕空　三味　本調子

筆のさや　合　たいて脊子待つ、蚊遣火の、うはの空にや立登る、みづに數かく枕の
下は戀ぞつもりて今日の瀬に　手事　身は浮草の　合　ねいる　合　まも無きア、儘ならぬこ
そ儘ならぬ

夕顔　三味　二上り

住は誰、問ひてや見んと黄昏に、寄る車の音づれも絶て床しき中垣の、隙間もと
めて垣間見や　合　かざす扇に焚しめて、空薫物にほの〻〻と、主は白露光りを添へ
て　手事　いと〻榮ある夕顔の花に結びし假寝の夢の　合　覺て身に入む夜半の風

ゆき　三味　本調子

花も雪も拂へば消きたもと哉　合　はんに昔のむかしの事よ、我まつ人も我を待けん
　合　鴛鴦の雄鳥に物思ひ葉の、凍る衾に鳴音はさゞなさなきだに、心も遠き夜半の
鐘　合　聞も淋しき一人寝の、枕に響く霰の音も、若やさいつそ堰かねて、落る涙の
つら〻より、愁き命は惜からぬ共、戀しき人は罪ふかく、思はぬ　合　ことの悲しさ
に、捨た憂　合　棄た浮世の山かづら

ゆめ　三味　二上り

夢の浮世かうき世の夢か花も紅葉も一盛り　合　淋しき夜半に音信て　合　枕に通ふ琴の
音は　合　誰にあかして明して、月につきに明して小夜千鳥　合　ア、浮世じやな、千代
も盡せぬ松の風

●め之部

名所土産　三味　本調子

水無月の、初旅衣きて見れば、此處は住よしあをによし奈良坂越て夕暮の、空も
靜に、寂滅爲樂と告わたる　合　これぞ名にあふ大佛の、かねをと洩て高まどの、餘處

にうき名やたつた山、三輪の山路を裳裾の糸の　合いとゞ　あげ節　春日野の、社に暫し此手をば、合せ鏡の底清く、あれ〳〵南に雲の峯、暑さ凌ぎの三笠山　合月のなゝ瀬の飛鳥川、變るや夢の數添て、名所〳〵は都の辰巳、宇治の川面ながむれば　合三下り　遠に白さは岩越す涙か、晒せる布か、雪にさらせる布にて有そろ　合賤の女がはぎもあらはに　合よそね島、馴れし手業も玉ぞ散る、涙のうね〳〵白玉ぞ散る　手事二段本調子　あら面白の景色やな、あられも白のけしきやな、我も家路に立かへり、土産に語らん花の家土産に語らん

●みの部

都土産

三味　本調子

花のあけぼの紅葉の夕、相見しことのつもりては　合ふちと名づくる大井川　合とがれよるべの涙の上　合うかれ〳〵ていつかはと　合たのみあらしの山の端に、うつろひ安き世の人の　手事初段二上り後段　あだし心を散さじと　合かむらが袖にしのばせて、あかぬ契を、千代もいとはト

御山獅々

三味　本調子

神路山むかしにかはらぬ杉の枝　合かやの御屋根に、でしきの玉も　合ひかりをてらすあさひ山　合きよきながれのいすゞ川、御裳濯川のほしあみの　合宇治のさゝろと見渡せば　合ころはやよひの賑はしき　合かどにさゝたてすゞの音、獅子の舞ぞ、うたひつる山をこしたる小田の橋　合岩戸の前に神樂を奏し　合二上り　二見の浦の朝景色　合岩間によごむもしほぐさ　手事關寺の夕景色　合のべの螢や美女のあそび、うかれてくむや盃の　合三下り　はやにさぐちに紅葉の　合そめてたのしむおい人の　合淺間　合山ながめもまさる奥のゐん　合晴れ渡りたるふじの白ゆき

御代の春

三味　本調子

ときわなる　合松も榮ゆく御代の春　合惠みをうけし糸竹の　合その一節に移り來て　合梅が香したふ鶯の、なく音もあかぬ千代八千代　合かはらでこゝになれてきく聲にちとせの齡契らん

みつれんぼ

三味　三下り

琴の音色のやさしきに、つい三味線のうつり氣に、なるかならぬか胡弓でしれよ
ことに心は糸すじ多く　合調べ調べぬ昔がましよ、時節を待つや二世の縁、結びし
神の頼まれがたや、この手柏のふたおもて　合かひもなく音もしのび駒　合その駒の
緒にひかれ、長きあたな月日をたつかゆみ　合ひく手あまたの手をじつと、しめて
ねじめの枕糸、かはす中ごとなるかねを、つくづくと命はせつばのこひどかの嬉
しさ千代までも、鶴の巣ごもり末を待つ二上り合手事巣ごもり巣籠り鶴の巣でもり
末を待つ　合松の齢を諸共に　合榮を祈る神ごまの引あはせこそおもしろや

都十二月（みやこみやげともいふ）　三味　本調子

初春の門松祝ふ注連かざり、表にさら〳〵新袴、大福屋德右衛門が、年始の御禮
はかたじけなし、禮者の外はさん〳〵に手鞠や拍子七艸、はやして來るやら春駒
なんろ、鳥追ちよろけん德助萬歳大黒舞、稻荷山の白狐、こんど過たる初午の、
賑はふ群集の土産もの、布袋いなりに撫牛まんぢう食ひ、鈴やでんぶう福助おた
福、さつても見ごとな、樅茸たいて涅槃の女夫あい、飾る節供や雛祭、お道具數
々あれわいさの、よいやさトや〳〵、簞笥長持葛籠に衣桁、嫁入り道具はや〻産
したじ、つひに御誕生れ釋迦さん、花の屋形に産湯の甘茶、花より團子、やんち
やも過て、こわい男の兜武者、義經辨慶、武内太閤、佐々木に執比奈、巴山うば
ちやりの筑持　合御注進口上云ふて、汗拭ひ暑まさりの祇園會、鉾の囃子はちやん
ちき〳〵ち、分て賑はふ夕涼み、かる業ものまね見せもの淨瑠璃、茶店の繁昌
子供ずかしの酸醤提燈、祭り七夕明年の〳〵、やれなごり惜やのれんごくなは〻
なは〻やれんごく、なはよい〳〵船は出て行く、帆掛て走る、れほ大小だい妙法
船岡とり一文字、みんな出て見る今宵の月見、丸い小芋を塗箸で、ぬるり〳〵〳〵
ぬる〳〵と、はや菊月や後の月三夜はれして、せめて七夜か、十夜の鉦は、ぐ
わん〳〵ぐわんぐわらぐわんのぐわん、叩きたしたる戎講、福を賜はれ、遣ろ共
〳〵、何なと遣たい顔見世の、座附手打の拍子よく、ちようちきち〳〵、ちよう
ちきち〳〵、ちよ〳〵ちき〳〵、ちようちきち、ちよろ〳〵〳〵、ちようちきち
ちよちき〳〵、ちようちきち、祝ひませうこと事始めむかひ三軒両ごなり、こちも

一所に餅をつく音は、ぽん〳〵千石萬石かず〳〵に三百六十ごしを經て、厄拂ひませう、と年越に、掃除をするやら大三十日、みな禮者の靜日出度けれ

峯の雪　三味　二上り

かゞふれば、五十二年をすがりにて、常なき風に散る花は　合ぽんに愛想も夏木立
合惜めどさらに甲斐もなき、其言の葉は峯のゆき、つもる、計りで解やらむ　合胸
の思ひを糸竹の、調べはほんの魂いさめ

翠簾の内　三味　二上り

散か〳〵る花こや人の惜むらん　合戀の流れの今出川末しら川の便も切れて、殘る一
人の兒ざくら　合ひとりのちご櫻、かたみと見るもあだなれや、いつそ此身はかう
して濟そ、とは思へども名に高き、花の匂ひの姥ざくら迄つゝこめする氣は無いも
のを、神に祈りの伊勢ざくら、見し玉だれの内ぞ床しき

水馴棹　三味　三下り

春雨に、名のみゞ殘る梅の花、やなぎにつるの替ことば興ある聲のいろ〳〵に、
藻鹽草さく人の癖、見せに來たやら南や西に、すいと憧る〳〵柴小舟、ひくや三筋
に流る〳〵あせは、乾く間もなき水馴ざは

水鏡　三味　三下り

ひとめも知らぬ男なら、恨みも戀も有まいものをなまぜ近江の水かゞみ、寫して
見れば水底は、かたい堅田の石山にきつうのせたに、私やのせられて、思ひ過し
は我からさきの、一ッまへ帶しどけない振よ　合假令あはづと三井寺のかねては思
ひいる崎の　合矢橋の風ひらの雪のくれ　合實なれども徒ら髮の、いふに云はれぬ世
の中の、人のうはさも七十五日、浮名きのごくの山ほと〳〵ぎす、はてそうじやわへ
はてそうじやわへ、末はひとつの本の水

三津山　三味　三下り

足引の　合大和の國三津山の昔をかたるよも　合本調子いにしへに榴のはや、かしは手
きんなりと云ふ人有ける、其ころ耳なしの里に桂子と　合申す女あり、また畝火の
里に櫻子といへる遊女ありしが　合かの柏手のきん成に、契りをこめて玉櫛笥　合ふ

たみちかける掛るさゝいと淺からぬ思ひづま、月の夜あめの夜半とても、心をそめて通ふかみ　合住家も二ツの里なれば、月と花よと爭ひしに　合かの櫻子になびきてぞ耳なしの里へは來ざりける　二上り　其ごき桂子うらみ佗、扨は我身もかはる世の、夢もしばしの櫻子に心をよせて此方をば、忘れ忍ぶの軒の草　合はや枯がれに成ぬるは、元よりもたのまれぬ　合二みち成れば、此まゝに、住果べしと思ひきや　合只何事も時にしたがふ世のならひ　合殊更春のころ成れば　合盛りなる櫻子に、移る人をば恨むまゝ　三下り　我は花なき桂子の我身を知れば春ながら、秋にならんも理りや　合さる程に　合起もせず寢もせず夜半をあかしては　合春のもの迚ながめふる夕暮に立出て　合入相もつく〳〵と南は香久山や西は畝火の山に咲く櫻子の里見れば、更によそ目も花やかに　本調子　うらやましふぞ思ほゆる　合あら恐ろし、山風や我は畝火の里に住む、櫻子といふ者なるが、かやうに物に狂ふぞや　合因果の花につき慕ふ、嵐を除てたび給へ　合光りちる月のかつらも花ぐかし、元より時ある春の花、咲はひが言なきものを、花もの言はずと聞つるに　合など言の葉を聞すらん春いくばくの身にし有て、かげ唇をうごかすなり　合扨花は散ても又もや咲ん、春は年々、ころは彌生の雲となれ櫻子、くもと成れさくら子、花は根に歸るねたしは後妻を　合打ちらし打散す、うて共さらぬは、煩惱の犬さくら、花にふして泣叫ぶ　合なみや亂るゝ花ごゝろ　合有明ざくら光りそう、月のかつら子一ッよに　合二みち かくる三ッの山、あらそひ立や春がすみ天の香久山うねひ山、たな引そめてみなし山　合春の夜みちてほの〳〵と　合しのゝめの空と成にけり

三ッの星　　三味　三下り

世の憂さは、戀とや義理とに任す身の　合難波の梅の實生より、都の風に散る此身雲井に近き我つまの、緣のきれめの藤ばかま　合ゆかりの色や花むらさきの、今は袂も墨染に、そめてかひ無き憂き身ぞや九曜の星のそれならで、殘るしたぎの三ッほし

道づれ　　三味　二上り

何處へじやゑ、私は丹波の笹山へ　合私も連て行かしやんせ、女の道づれいらぬ者

はて胴よくな和尚さん、そんなら來いさ手を引て、梅田づゝみを眞直に　合行ば程なく丹波なる、さゝ山にこそ着にけり

みつのを　三味　本調子

幾年か、仇に調べし三つの緒の　合いとし可愛と音じめの口說、退の退ぬこすねたせりふは心の手ごと　手事愛想づかしは云はぬが花よ、花も此身も今や世にふる詠めせぬまにヲゝそれよ　合いつそ五ツの湖に棹さし留ん海人小舟

●し之部

新道成寺　三味　二上り

花の外には　合松ばかり　合暮初て鐘や、響くらん暮初めて鐘や響くらん　合鐘に恨みが數々御座る、先初夜の鐘を撞ときは、諸行むじやうと響くなり、後夜の鐘を撞ときは、せじやう　合滅法こひゞくなり、晨鐘の響きには　合生滅、入相は、寂滅、爲樂と響けごも我ごしやうの雲はれて、眞如の月をながめ明さん　合道成卿は承り初て伽藍たちばなの　合道なりこうさやうの寺なればとて道成寺とは、名づけたり　合山寺の春の夕暮來て見れば　合入相の鐘に花や散らん入相の鐘に花やちるらん　合さる程に〳〵寺々の鐘、月落鷄ないて霜ゆき天に、みちしは程なく日高の寺のこうそんの漁火憂ひにたいして人々眠ればよき隙ぞとて立まふ樣に覘ひ寄てつかんと爲しが思へば此鐘うらめしやとて、龍頭に手をかけ飛ごと見ゆしが引かづいてゞ失にける

新松竹梅　三味　三下り

前弾　千歳ふるてふ老松のいとゞ緣も色そふて　合若やぐ春と猶茂るらん　合本調子直なる千ひろ竹のよをへつゝ　合榮ゆく御代の末かけて盡ぬ契りぞ樂き　手事合上り　梅の花清き色香も慕はれて　合からも日本も昔より　合げに愛らるゝ花は此花

松竹梅（十二曲の内）　三味　二上り

立わたる、霞を空のしるべにて、長閑き光り新玉の　合春たつ今朝は足曳の、山路をわけて大伴の　合三津に來鳴うぐひすの　合南より笑ひ初む、薫りにひかれ聲のうらゝか　合羽風に散や花の色香も猶し榮有此里の、難波は梅の名所三上り　合本調子君

が代の濁らで絶ぬ御溝水、末澄けらし國民も、實に豐なる四の海　合　千歳限れる常盤木も、今世のみなに引れては、幾世かざりも嵐ふく、音　合　枝も榮ゆる若みどり生立松に巣をくふ鶴の、久敷御代を祝ひ舞ふ　手事三段二上り　秋は猶月の景色も面白や葉末々々にさす影の、臥所に寫る、夕間暮、外面は虫の聲々に　合　かけて幾よの秋に鳴く、音を吹れくるあらしにつれてそよぐは窓のむら竹

新きれ盡し　三味　二上り

春立て實に長閑にも住吉の岸の小松を根引せん　合　東の山に出る日の影曇らト白極の　合　かみの内の雲雀花に蝶紋あらしは辭よ　合　颯と下すや伊豫すだれ花のくも山吹からに　合　散やちり〳〵花きりん　合三下り　いつか扇の夏げしき　合　しば山くは山はたけ山望む高の丶峰たかき麓に流れ細川の妹があと問ふ常夏の花の撫子しも妻と　合本調子　夕露拂ひつゝむ袖の木下蔭に宿りして夏を忘れて秋風の　合　其望月の影照らす鐘の聲きは興福寺、紅葉の錄黃昏の、みやこ告る入相は先ぜんりう寺南禪寺、數も限らぬ高臺寺、なに正ばう寺祥雲寺　合　千たい佛を誓ひにて、嘘ゝやおじやらぬはんぐわん寺、雪の下にもきにならば、一夜は明せあさ倉の、鳥のたすきや三雲や、かり場に急ぐ丈夫が　合　鎌倉風の袴ごし、大友菱のだて模樣　合　劔ざきしやんと差袖は糸や蜀金朱座にしき、釣石だゝみいろ〳〵と、盡ぬ榮ゆは長樂寺かはらぬ、色や常盤なる、さたけ松もこ千代八千代

新秋の色　三味　本調子

底清く、清きながれの鴨河や、水に寫ろう影すみて　合　月は浮世の外なれや思ひくまなき夜もすがら、ふけて站の音遠く　合　雲ゐに渡る雁の、越路忘れて通ふらし、盛りを見する萩が枝や、妻こふ鹿の聲おかくして　合　招く尾花に結ぶ露、深きちぎりの例なるべし

新緣の綱　三味　二上り

春はいろ、笠にふらる丶雪よりも難面人の冷さを六ッの、歌仙も詠わびて、箭竹心に戀すてふ　合　かざすや金のかんざしのさす手引船磯邊もよせず　合　沖にゆら〳〵由良の戸のおつこ取かぢ合點トやゑいかア、ようそろのんこ帆を卷たての船歌は

丸に三ッ引戀風や、君にあふぎの替紋は、色のつかさを求めん手くだ、中を隔てるませの菊咲しも憎や、夕照に顔は紅葉の戀のれに 合 丹波大江の山よりも勝る思ひや八雲立出雲やへ垣つまでめは何處へ、結ばん緣の綱

松・陰の月　　三味　本調子

前引 軒端の松に秋風の 合 音も淋しきふくる夜に 合 かゝるこゝろの浮雲を吹さ拂ひつゝ澄みのぼる 合 月のみかげうあきらけき 手事二上り うきを慰むかたみとて 合 まつのあらしを琴の音にして

四季の壽き

明け渡る春の山家を見渡せば 合 花、鶯の色音にも 合 君はなゝそなゝちよと 合 軒端の松に鶴の聲 合 夏しらなみの夕風に 手事三下り やがて涼しき月かげに 合 清くやどして 合 加茂のはがはの友千鳥 合 いや千代千代と歌ひまつれり

新都獅子　　三味　本調子

君にこそ 合 さかりも見ゆれ、おさまれるゝ、 合 花のみやこによろづ代の 合 春ふく、よろづよろこびの 合 つきせぬいろのふかみぐさ 合 今日も富貴の花と見て、めづる心のやさしさに 合 たけき姿もにくからト 合 戯れ遊ぶ獅子の曲 合 手事二上り しらべ柔ぐいご竹の、聲はなやかに舞の袖、かざす扇のひまよりも 合 花のかほばせあてやかに、花のたもとつきトなく、かへすがへすも、いく萬代や經ん

新玉かづら　　三味　本調子

こひわたる 合 身はそれならで玉かづら、いかにやつれてつくしがた 合 思はぬ人のあだてひに 合 うきもつらさもこもりくの、はつせの神の神垣に、かけしめぐみもありあけの 合 月の都のしなさだめ 合 手事 もこのかきねは問ひもせで 合 その夕顔の 合 ゆかりさへ 合 二上り たのまれ難き人ごゝろ、身をのみこがす螢こそ 合 いはぬ思の亂れがみ、とけぬあたりにむすびしも、なか〳〵かたき岩田帶 合 前彈 手事中散 手事 三下り たれかゆるしのいろに出て、さかりも見せじ女郎花 合 こゝろも知らでをなし野の、つゆにやるゝふじばかま、あはれをかけよ、かごさばかりも

新浮舟　　三味　二上り

まめ人のこゝろのかをりわすれねど　合いろ香もあやに、さく花の　合あだし匂ひにほだされて　合つゝまゝき名も　合たちばなや　合小島のさきに、ちかひてし　合そのうき舟の行衛さへ、いざしらなみの音すごき　手事此ちらし若菜のちらしに合身も宇治川のもくぢとは、なりもはてなで世の中の、夢のわたりの、うきはしを、たどりながらもちぎはあれど　合すゞしきみちにいれんとて、うつゝにかへす、小野の山里

新青柳　　三味　本調子

さればみやこの花ざかり、大宮人の御遊にも秋菊の庭のおも、よもこの木蔭枝たれて　合暮にかずある靴の音　合柳櫻をこきまぜて　合にしきをかざる、もろ人のはなやかなるや、こすのひゑ、もれ來る風のにほひきて　合手事二上り手飼のとらの引づなも、ながきおもひに、ならのはの、そのかしは木も及びなき、こひはよしなしや、これはれひたる柳のいろの、かりぎぬのかざおりも　合手事ちらし三下り風にたゞよふ、あしもとの　合たよ〳〵としてなよやかに、立まふゝりの、れもしろや、げにゆめ人をうつゝにぞ見ん、げにゆめ人をうつゝにぞ見ん

深夜の月（四曲の内）　　三味　三下り

山の端に、一連見ゆる初雁の聲も淋しく徒らにあだし言葉の人ごゝろ、飽ぬ別れの悲さは夢うつゝにも其人の知らぬ思ひの涙川うつす姿や鐘の音に、空飛ぶ鳥の影なれや　手事それならぬ　合戀しき人は暴き風、憂き身に通るはげしさは、君に恨みは無きものを　合小萩における白露の　合くだけて落る袖たもと　合思ふ心のたゞに虫の聲々さへ渡る、鳴音ふけ行く秋の夜の月

四季の眺（四曲の内）　　三味　二上り

梅の匂ひに、柳もなびく春風に、桃の彌生の花見て戻るゆらり〳〵こ、夕がすみ春り野がけに芹よもぎ　合摘かけたる面白さ　合里の卯の花田面の早苗、色見ゆて、繁る若葉の陰とひ行かば、まだき　合初音の山ほとゝぎす、一聲に　合花の名殘も忘られて、家土産に語らばや　手事三下り草は色づき、野菊も咲て、秋深き、野邊の朝風露身にしみてちらり〳〵こ、村時雨よしやぬるとも紅葉ばの、染かけたる面白さ　合野邊の通ひ路人目も草も冬枯て　合落葉しぐるゝ木枯のかぜ、峰の炭竈けぶり

も寒し 合 降る雪に野路も山路も白妙に、見渡たる面しろさ

新　芦　苅　　三味　本調子

名に高き、難波の浦の夏景色、風に揉れて芦の葉の、さは〳〵も音に聞く 合 此處は伊勢の濱荻をよしやあしとは誰がつけし 合 二上り 我は戀には狂はねど戀こいふ字が迷ふ故、さりとては白鷺にこゞゑれ留れと招く手風に行過て、又も催す濱風に、芦もさは立ち磯の波、松風こそさゞさんざ

新　七　草　　三味　二上り

たうどの鳥とエ日本の鳥とエわたらぬさきに七草はやしてナ、君をいさめの 合 君を祝ひて、若菜摘

新　壽　　三味　本調子

紅を匂ふ姿の糸やなぎ、緑りを垂れて昔を忍ぶ 合 みどりをあゆて千歳を招く、へぬらんの、松といふ字を縫紋の、山の笑くぼに殘の雪の、可愛らしいじやないか、いな 合 お月さまいくつ琴の緒に 合 一つますく〳〵壽く糸の 合 ねん〳〵ころりん〳〵と限りあらゞな新玉の 合 春にかへる暦も、千代のしをりかな

時　雨　が　さ　　三味　三下り

思ひには、どうした花の咲でこく 合 身にぞ知らるゝ憂やつらや、いかに習ひじや勤めゞや迚も、いやな客にも逢はねば成らぬ、やぼなら斯した憂めはせまい、いこし男のア、儘ならぬ、首尾の相圖や手くだの枕、むりな事でもどうやら可愛 合 馴染かさなり樂む中を、逢わぬ愁さにな、憧れしよりも、逢ふて別るゝ鐘の聲、いつか曲輪を放れてほんに、ほんの女夫と云はるゝ成らば、今をむかしの語りぐさ

し　ぐ　れ　月　　三味　本調子

神さんの、いつ來月がもごり月、私が心はすめゞらぬ、難波の、芦をよそに見て 合 花の都へ歸りざき 合 はなの、都へ、かへり咲 合 眞實せいもんで、名殘を惜むまゝ成らぬ身は、浮世かへ

四　季　の　雪　　三味　本調子

そも〳〵天の濕ほひに、雨露霜雪の四つを見せ同ゞく雪月花の、三つの徳を分つ

にも、雪こそ殊に勝れたれ、先づ春は梅さくら合二上り咲より散までも雪を忘る、色はなし、夏は五月雨の合ふる家の軒はあれながら、庭に曇らぬ卯の花の垣根や雪に紛ふらん手事三下り夜寒忘れて待月の合山の端白き影みゐて殘ん雪かと疑はれ冬野に殘る菊までも、また初雪と面白や、山路の憂きや忘るらん、山路のうきよや忘るらん

新子の日　三味　本調子

今日は子の日の遊びといへば、思ふ友だち皆つれ立て、行や小塩の道々見れば、賤が仕業の暇と見へて、此所に羽根搗かしこに手鞠、玉やぶり〳〵春めき渡る、誰が垣根も床敷見へて垂れ柳のいと青やぎて風にたよ〳〵なみ寄るかげに、雲雀山雀ひよどり頻じろ、おのがとり〴〵調子をわけて聲も長閑に囀るもこに、永き日影も暮かた近し、卒や歸らん我宿へ合二上り春は越路に歸らん頃を、いつの年より頼やおきて、斯る盛りの花さく頃の、心のごけき都の春を合捨ていくへの波路を分て、行は恨めし飛雁がねの、中に少しは都の空に、餘波惜くも有かと見へて十や十一十二や三や、おのが樣々群行中に合聲も可愛くれくれて飛ぶに、少時休へ文ことづてん、頓て紅葉の照そふ秋に、聲をほに上げ皆つれ立て、渡れ都の池水に

舌づゝみ　三味　本調子

萩の戸へ、立やすらひし、忍ぶ月、さらぬ別れの後慕ふ、通ふ嵐に亂れて解て合尾花が袖も、かりの枕の通宵合所詮つれなや仇ふる事と、思ひ廻して舌皷合しよせんつれなや仇ふることゝ、思ひまわして舌つゞみ、由緣と問へばかげのきく

信夫山　三味　三下り

冬木立、深き哀れは知らるゝものを、昨日の露は今日の霜夜の合ねられぬ儘に思ふはいろ〳〵合心の奥のしのぶ山

石橋　三味　三下り

我も迷ふやさま〳〵に、四季をり〳〵の戯れに、蝶よ胡蝶よせめて暫しは手にとまれ合見かへれば、花のこかげに見えつ隱れつ羽を休め、姿やさしき夏木立、心、

つくしのナ此年月をへ、いつか思ひの晴るやと、心一つにあきらめて、よしや世の中合短夜に、夢はあやなし其移り香を、憎て手折か主なき花を、なんのさら、さら〳〵さらに、さらに戀はくせ者合露しの丶めの、草葉になびく青柳の、いと幽艶く、二ッの獅々の身を撫て、頭うなだれ耳をふせ、花に宿かる、浮世のあらし、那方へ誘ひ此方へよりつ園の胡蝶にたはぶれ遊ぶ、己が友よぶ獅々のこま合花に寄るてふ連だちて、追ひ回り下りつ、上りつ、そはへ揚羽のしほらしやおひ回り下りつ上りつ、そはへ揚羽の幽艶や、面白や合時しも今は牡丹の花の、咲や亂て散は〳〵散來るは、ちるはちるは散くるは、散れ〳〵ちりか丶る樣で、おいとしうて寢られぬ、花見て戻ろ、花には憂さをも打忘れ合人目忍べば合恨みはせまい、爲に沈みし戀の淵合心からなる身のうさを、やんれそれは〳〵ェ、誠うやつらや花に胡蝶のきつれて合心からなる身のうさを、やんれ其れはそれはェ誠憂や愁や、花に胡蝶の來つれてつれて、くせもの〳〵よるべ、よるべや波の、立名も儘よ、口說ど君は難面さよ、ナ、それそれじや實にさ、思ひ廻せば昔なり合牡丹に戯れ獅々の曲、げに石橋のありさまは、笙歌の花降り蕭笛琴箜候、夕日の雲に聞ゆべし、目前の奇特あらたなり合暫く待せたまへや、影向の時節も、今幾程によも過じ合獅々とら殿の舞樂のみぎん合獅々虎でんの舞がくのみぎん、牡丹の花ぶき匂ひみち〳〵、大きんりきんの獅々頭、打　や囃せや牡丹ぼう、紅金の瑞あらはれて、花にたはぶれ枝に臥轉び、實にも上なき獅々王の勢ひ、なびかぬ草木もなき時なれや、萬歳千秋こ舞納め、萬ぜい千しうこ舞をさめ、獅々の座にこそ直りけれ

忍び駒

三味　三下り

口きりの、音じめやさしき忍び駒、心はごうか竜馬の、壁に浮名を立つうき名知らず、しはぶきそら耳に、潰したい程、つぶされて、ェ丶私やほんこに去ことは合戀のしてふに懸り船、その高砂のまつこそ憎や、つらや軒端にあくがれて、恨み心の夜もすがら

四季の花

春は花夏は立花秋は菊冬はすいせんむろの梅

島　臺　　三味　二上り

初春の祝にうたふ高砂の　合　尾上の松の下かげに落葉かくなる尉こうば　合　千歳の鶴も羽をのして　合　龜のあそびも、きは一つ　合　笑ふかごには福の神　合　やがて富貴自在になるならば、松竹梅じやないかいな

●ゑ　之　部

越後獅々　　三味　三下り

「越路がた、御國名物さま〳〵成れど田舍なまりのかた言交り、しゝ兎なる言の葉に　合　面しろがらしそな事猶、ゑい浦の海人の子が、七ッか八ッ目鰻迄、績や綱苧の綱手とは　合　戀の心もこめ山の、當皈うわ氣で黄連も、なに糸魚川いと魚の　合　もつれもつるゝくさ浦の、油うるしと混交て、末まつ山のしろ布の縮みは肌の何處やらが、見ゆ透く國の風流を、うつし太鼓や笛の音も、ひいて唄ふや獅々の曲　合　むかい小山のしちく竹、枝節そろへて、きりを細かに十七が、室のこぐちに晝寢して、花のこゝろを夢に見て候　手事　ゆめの占かた越後の獅々は、牡丹は持ねど富貴は已が　合　姿にさかせ舞納む、すがたに咲せまひをさむ

繪そらごと　　三味　二上り

かりの世に、かしに行身の苦をぬけて、人だち多き春野のに、忍ぶ顔なる何時まても、かはらぬ色は常盤木の　合　枝にたゝへて誓ひしこゝも　合　閨の扇の繪そらごとかや思ひの增はいな　合　扇のねやの閨のあふぎの繪空でとかや思ひのまゝすわいな　合　ほんにかはれば又川竹の、沈む心をひき立る、酒は、うき身の忘れぐさ

縁のつな　　三味　三下り

かち人の渡れど濡ぬ縁しあれば　合　また逢坂の關の戸を、こさで其身の行末を　合　むすぶの神こいはもとの　合　堅ひ顔して油斷させ、惚たこゝろを見拔いてすねてすねて、花あり實もありはらの、昔がたりの縁のつな

ゑ　び　　三味　三下り

ゑびはもゝよりおきなにて、こしにあゞさの弓をはり、目までめでたき千代の春

●ひ　之　部

ひとりぼうし

三味　二上り

なつかしき、そのふの宮のちまたより　合　我名慕ふて干早振　合　神の昔に心をしめて
待てば月日のたつか弓　合　いるこしかたを尋ねて問て、文でかゝせて筆の鞘　合　手事
たきて待夜は心をしめて、しめて待夜の蚊遣火さへも　合　いぶせく立て只ならぬ、
辛苦辛氣の身はひとりぼうし

鬢のはつれ

三味　三下り

びんのはつれは枕の科よ　合　まくらの科よ、曇り無き身を疑はれ、はて何としよ
一ッくずや

一ッ夜着

三味　本調子

ひとつくづ家に、〳〵、四季の花、粋な水仙、室ざきの梅　合　いとし可愛と撫子の
合　よれつもつれつ糸櫻、垣根卯の花かきつばた　合　からさは歌の女夫なか可愛らし
いとやないかいな

三味　二上り

櫛いれぬ、秋の柳の枕さへはづれ次第の假寢は、誰に、すねてと人の問ふ迄、は
に出る　合　其稻舟の最上川、堰にせかるゝ、したよりも　合　今宵までこの只一つ、思
ひ遣りなき男氣のかみかけてこは仇なみの碎け過たる二人が中も、恨みられたり
恨みたり後は互ひに云ふことも、何の斯のなき一ッ夜着

一人寢

三味　三下り

色見へて、移り香れしき世の中に、人目忍ぶの戀のやま、思ひも憂しや去とては
一人寢られぬ床のうち燈し火消て我すがた、見ゐぬ寢覺の夜もすがらいつそ明な
ば明よかし

鄙の袖

三味　三下り

雲井にまがう海の面、誰が波立て逢ふ事も、淀みがちなる世の憂さを　合　我は人目
にせかれては、磯の千鳥となき明し　合　なんの儘よと苦界もやめて、うき寢數そふ
時鳥あふ夜短しのはぬ夜長し、心からとは思へども、辛氣〳〵ゑ、あはぬ夜
長し心からとは思へ共、辛氣〳〵ゑ、干にほされぬ鄙の袖

東山

三味　三下り

圃團きてねたる姿は、ふるめかし、起きて春めく知恩院、其樓門の夕暮に、すいたれ方に逢ひもせで、すかぬ客衆に呼びこまれ、山寺の入合告ぐる鐘の聲、諸行無情はまゝのかは、わしはむせうに上りつめ、花の頂きざれいて見やう、花はうつろふものなれど、葉こそ惜しけれ、惜しけれ葉こそ、緑りのめだち色ふかみ草

東まど

三味　三下り

逢ふ時は、語りつくすと思へども數々のこる言の葉を、思はでつらき、鐘のこゑ〳〵聞ゆなる、夫のみ成かくだけの、まゝだきに明て夜も明ば、きつにはめなとかこちつゝ　合三下り　あふさきるさの物れもひ兎角逢ふせの涙川、袖の柵みせき留んゆも思ひはまさり草はずるに置る露の身が、もろき命に知らねども又いろ〳〵と云ひかはす、言葉のうちに後朝の、別れを急ぐ東まど、明てくやしき玉手ばこ

ひお鶴

三味　本調子

雛鶴が、其枝々に巣をくひて、君ゆたかに、我もゆたかに　合　すめる民こそ久堅の、光り長閑き春の日に、賤心なく花の散らん　合　げに散ればこそ〳〵、いとゞ櫻は目出度けれ、散らぬ花たぬ春がすみ、誰か忍ばん鶯の　合　谷より出る聲さえて、野の末山のれく迄も、同じ惠みにあひたけの、齡ひ久敷松はなほ君にひかれて　合　萬代やへん

一ツ橋

何事もよふ、知て居てあて言を、無理じやなけねど又しても憎さも、憎し、いつそに、今朝は去すまいとは思へども　合　有し不首尾も外からも我身の科も云ひ立るこちの、心はほんにくつさり急げば、廻る辛氣、心の果しなや夫も厭はず、今こそ斯うよ、末は添ふもの身の一期のふ身のいち期、渡り初ては斯浮世にも心だよりの一ツ橋

三味　二上り

ひなぶり

戀の重荷のな島の内、送りむかひにかく駕の誰であらうこしてこいな　合　棒ばなに括りつけたる提燈の　合　日柄の約束、爲て來たな、高いも低いも、色の道なへ　合　立

三味　本調子

るたてんの息杖も、盡ぬ樂みゐいさつさ、さつさおせ〳〵夢の通路なへ

ひさご　三味　二上り

ほの〴〵と、花の夕顔をりはへし、殿上ぬけの色男れんなゝ花の、其下すゞみ、てゝら二布の妹脊中合是にはまさじ待こひの戀の山から、宿かり初も深き洞生いけんは何ぞゝ、喧し、鳥にくまぬ鳥羽玉の墨の衣も餘處目には、鬢のほつれも見許やないがあゝな頭で南無阿彌陀の聲にあひもつ拍子ごりいよのふ、瓢簞じやエそれ瓢じやのふ

晝寢　三味　三下り

夏の日に、晝寢の種と成ものは、月の口説か螢の恪氣合微々風に欺されて脛もあちはに寢亂れの合裾に、あふせの姿は憎しほんにエ、物好すぎた世のたとへ言葉の數々も、夢の世なりし枕蚊帳

火桶　三味　二上り

浮名たつ、事の耻かし夜る毎に、肌さはたゝを温めて、思ひの儘に撫さすられて合寢覺の伽は吸付たばこ、愛想も一寸くぜつ言、煙管で叩くかんしやくに、思ひ寄るべの文の數、肌身放さぬ年月を、うつれば變る飛鳥がは、花に寢とられ合夏はまた時鳥めに見かへられ、つゐ秋風と餘處にふく、雪が粹だけ仲人して、逢せてくれる嬉しさを、昔がたりの張火桶

●も之部

紅葉づくし　三味　本調子

秋ふくるみやまかへでの小夜しぐれ、手染のいとの龍田姫、おり出す錦しな〳〵に合その名も高雄小倉山、みゆきまたなんあすか川、かはるこゝろは薄紅葉、からくれないの立田川、流れてとまるしがらみに合もみの浪路のはるかなる、ちさとのほかの唐錦、わが敷島の道しるべ合紅葉がさねの名取川、きみ松ケ枝のゆふぐれに、月の影さへ通天のをちこち人のみちのくのしぐれ紅葉や、いともみち合二上りよる年波の水鏡み、うつろふ色のふたおもて合わすれがたみは朝露に合かりの玉章合蔦もみぢ合またきさらぎの花よりも、ます紫のひとしほに合酒あたゝめ

しから歌の　合　むかしをしのぶ須磨の浦　合　青葉の笛の鹿紅葉　合　妻ぐれなゐや青海波
合三下り　夜るの錦にふるさとの　合　風のたよりも神無月　合　數はやしほか九重か　合　十二
ひとへの裏紅に、薄柿うこんいろ〳〵をかぞへ〳〵ていくしほか、秋の名殘を詠
むならまし

紅葉狩　三味　三下り

雨打そゝぐ夜嵐の物すさまじき山蔭に、月待ほどの假寢　合　は片しく袖の露ふかし
夢ばし覺し給なよ給なよ　合　あら淺ましさ我ながら、無みやうの酒の醉ごころ目睡
ひまも無うちに、あらた成りける夢の告と　合　驚く枕に雷火亂れ　合　天地も響き風れ
ちこちのたつきも知らぬ山中に覺束なしや、恐ろしや　合　不思議や今まで在つる女
ふしぎや今までありつる女ごりご化生の姿をあらはし或ひは巖に火炎をはなち
又は虛空にほのふを降らし、咸陽宮のけむりの中に七尺の屏風の上に猶あまりて
高き鬼神のありさま角は古木、眼は日月おもてを向べき樣ろなし　合　惟茂すこしも
騷がずして、惟もち少しも騷ぎ給はず、南無や八幡大ぼさつと心に念じ劍を拔て

待たまへば、微塵になさんと飛でかゝるを飛ちがへむづと組み鬼神の正中さし通
したまふに頭を掴んで上らんとすれば切拂ひ切はらひ劍に恐れて巖へのぼるを引
おろし刺とをし忽ち鬼神をしたがら給ふ威勢の程こそそれそろしけれ

せ　之　部

關寺小町　三味　本調子

思ひ出れば懷敷や、人の恨みの積り來て、何時の頃より浮れ出　合　賴むものには竹
の杖、ないつもらふつ物狂ひと、人はあたし野夢なれや、問ふは恨めし昔は小町
今は姿も耻かしや、誰はとめねど關寺の庵さびしき折々は、都の町にうかれ出で
往來の袖にすがりつゝ、憂事の數々を見給へや人々　合　春は梢の花にのみ、心をよ
せて短夜の、ほとゝぎすゆき見草あさ澤のかきつばた、菖蒲藻の花かれ〳〵に、
螢も薄く、殘る朝の名も廣澤の月の影、かこち顏成我なみだ、落葉時雨にぬれ初
て、我ながら耻づかし三下り百夜忍ぶの通ひ路は　合　雨の降る夜もふらぬ夜もまして
雪霜いとひ無く、心づくしに身を碎く、一夜を待たて死たりし、深草の少將の、

其怨念の附添ひて、かやうに物を思ふぞや、耶方へ走り此方へはしり、ざらり〳〵、ざら〳〵ざつと、こひ得ぬ時は 合 悪心また狂乱の、心づきて聲かはり、けしからず見ゆれば、寂々と關寺の、庵に歸る有様は、山田のあぜの案山子よの、あき果たりな我すがた

關づくし　三味　二上り

人知れぬ我通路の關守は、よい〳〵ごとにうちもねで、戀の流のしがらみに、なれて人目の關しげく 合 忍ぶのやまの露涙かゝれとてしもうば玉の、よる〳〵ごとにあだまくら、ひとりかたしく衣手の關、夕べ〳〵に海士人のぬれてかりほすわたづみの見るをあふにてやみてたゞ 合 それとばかりになこその關よ、かすみが關のかがでとにも、秋風ぞ吹白河の關路の鳥ははかるとも 合 世に逢坂のせきの戸は、あけて中々ゆるさねばあまる思ひを我ながら、猶せきかねて胸はふじ袖は清見の關なれや、煙りも涙ゆたゝぬ日ゝなき 合 戀にしな〳〵かはりがでざる、しのぶ其夜の月かげひとつ 合 わかれおそしと啼鳥の聲 合 あはで立つ名や逢ふての浮き名、

いづれ思ひの種ならむ

●す　之　部

墨繪の月　三味　本調子

前彈 露そむる野邊の錦のいろ〳〵を、ふみわけゆけば、かすかなる、あやしの竹のあみどの外面に、もれてうつろふ山の井の水 合 二上り 手にむすべば、月またやどる 合 つらき、野わきに吹さそわれて、墨繪にかきし松風の 合 れとやきぬたをそひ寢のゆめか 手事三下り なれてながむる人心、なぐさめかねつさらしなや、おばすてやまに、てる月を見て

すりばち　三味　二上り

海山をこへてこの世にすみなれて 合 ひよくれんりとちぎりし中も、煙を、たつるしづのめが 合 心ごゝろにあわぬ日もあふ日もよるはひとりねの 合 くれをれしみて松山かづら、ひるのみくらすさこもがな

すゐのよるべ　三味　三下り

すゐのよるべは、いさ白なみの、をきにたゝよふ捨小舟、かいなやつらや吹流されて、すいた泊りをまゝならぬ、いやな嵐を、ひらきてうけて合ほの字顔するうきつとめ、あたしんきなと口ぐせに合いうてなぐさむ心の底も、ふかひあさひのわけしそかわれどふでこひぢの、みをつくし、あゝくい〳〵思ふまい

捨扇　三味　三下り

秋風の吹けどもつるゝ花すゝき合かあいにくひのふたみちをいやな男になびくより合きれぬゐにしをきるのがすいか、世を山鳥の谷になくなる

墨繪の芦　三味　本調子

あめはれて露にしほるゝ萩桔梗合すゝきをなのる萬年の、賤がいほりをいふ人も合なく音はいとゞ鈴むしの、さやけき月をいまやとて合松の木かげに心さへ、墨繪の芦をうつさんと、筆をふるへば九重の合二上り雲の上にぞのぼる月、あれにしまごのやれみすを、もりくるかげは白紙の合すみのくま〳〵かきつみて吉原雀よしあしを、いふことの葉のつゆまでも合手事こまかにてらしわけらるゝ、ひかりもこゝにぬすかゞみ、みがく心の白玉は合げにあきらけく治まれる、ひじりの御代のしるしなりけり

末の契り　三味　三下り

白波のかゝるうき身としらでやは、若に見るめを戀すてふ、なぎさにまよふあま小舟合浮きつしづみつよるべさへ合荒磯つたふあしたづのなきてぞ共に合手事たつかゆみ、はるをこゝろの花と見て、忘れたまふなかくしつゝ八千代經るとも君まして心の末の契りたがふな

硯の海　三味　三下り

幾千代と、ちぎりあふ夜は鳥の音を、うらみし事もいつしかに、けふわかれ行く袖の露ぬるゝたもとは清瀧の合糸くりかへすをだまきに合しるしの筆の合後留めて合その玉章はうす墨の、ときわかきわにくれないの、むらさき山にはいまさふゐにし合ゆかりはのこれども合もし秋風や吹きぬかと合心はもしのせきぢなる合硯の海に打向ひ、ちさとをかけてかりがねの、たよりを松のことのはや、かりの

す之部　二頁書二

たよりをまつのことのは

すがゞき六段　三味　本調子

ここの音に峰の松風通ふらし　合いづれの緒より　合しらべそめけん　合手事すがゝき松

はときはよ、松はときはよ、いつもかはらゝことのはことに

琴曲歌の栞　畢

たよりをまつのことのは

すがゞき六段　三味　本調子

ここの音に峰の松風通ふらし　合いづれの緒より　合しらべそめけん　合手事すがゝき松

はゝきはよ、松はゝきはよ、いつもかはらゝここのはゝことに

琴曲歌の栞　畢

第拾参版
新撰琴曲歌集
定價金貳拾五錢
郵税金貳錢

目次

●君が代の御曲
●日の本の花（大和の花とも云ふ）
●日本軍人の曲
●武士の妻
●征戰の曲
●我敵役の曲
●海軍の曲
●御國の旗風
●國旗喇叭の調
●國歌の曲
●御國の誓
●邦の光
●金剛石
●水は器
●幼稚園
●手習ひ子
●新盤に題桜
●新曲紙
●金のちる木
●花の名殘
●花紅葉
●小楠公丸の調
●山科の里（外宮と云ふ）
●筑紫の海
●楠の一
●大内山
●國の礎
●野山の御幸
●青山の曲
●春の曲
●年の始
●盛せぬ御代
●春の光
●月次御題の曲（瑞水調）
●巖上の松
●松の響
●千代田の調竹雪の曲
●松上の鶴
●花の功
●千代の響
●明治松竹梅
●若木の梅
●鶯の生山
●梅の花笠
●梅の旅
●櫻の時
●宿の梅
●霞の曲
●若菜の曲
●鶴の音
●櫻の曲
●松の響曲
●櫻の曲
●みさゝ曲
●松の頂の曲
●舞の響
●千里の梅
●松の榮
●峰の若菜
●緑の夢
●鶴の曲
●瓦の曲
●蝉の山
●瀧の曲
●時鳥の音
●初雪の曲
●櫻の花
●桂の曲

255
206

明治四十一年十一月七日印刷
明治四十一年十一月十日發行

定價金四拾錢

編輯兼發行者　大阪市西區靱南通壹丁目十四番地　河野源太郎

印刷者　大阪市西區江戸堀上通二丁目百十二番邸　矢尾彌一郎

印刷所　大阪市西區江戸堀上通二丁目百十二番邸　矢尾弘文堂

發行所　大阪市西區靱南通一丁目十四番地　河野一進館

複製不許

●夕の曲
●秋の言の葉
●龍の曲
●紅葉の曲
●菊の人の曲
●秋の友
●庭の菊
●都の月
●小督の曲
●蛍の秋
●冬の山
●千鳥の曲
●緑竹の久
●日の聲
●新雪の月花
●四季の空
●三津の詠

●江の島（かへ歌）
●野衣
●川砂
●初瀬
●新高
●琴の曲
●唐の光
●中の地
●三つの御法
●西里の旅
●内國名所
●吉詣
●住り
●涙花巡
●花の香
●第五回博覽會
●かたみの鏡
●浪花の春
●新年の山
●あら玉
●御代の榮

●かたみの曲
●駿島の曲
●新年河
●三つ詣
●流川
●千代の光
●浦
●森の霞
●新岩根の松
●秋の壽
●初音
●位
●小紫山
●火の車
●國民の一致
●新年松
●門松
●御苑の松
●君が代の松

●國の若竹
●龍宮の姫草
●敦三つの景色
●花の朝
●錦の曲
●祐の曲
●那須の曲
●松風
●風雅の曲
●橘媛
●四十一とせ

大阪西區靱南通一丁目十四番地
河野一進館

255
206

明治四十一年十一月七日印刷
明治四十一年十一月十日發行

定價金四拾錢

編輯兼發行者　大阪市西區靱南通壹丁目十四番地　河野源太郎

印刷者　大阪市西區江戸堀上通二丁目百十二番邸　矢尾彌一郎

印刷所　大阪市西區江戸堀上通二丁目百十二番邸　矢尾弘文堂

大阪市西區靱南通二丁目十四番地　河野一進館

複製不許